

死者1名、7戸全壊、連続雨量272mm、死者が出た土石流は道路下部を崩壊源としていた

平成11年9月 川内豪雨災害(台風16号)

土石流が多発したが、砂防堰堤でくい止められ、人的被害は発生せず。砂防堰堤の効果が再認識された土石流災害であった。

平成13年3月 平成芸予地震¹⁾

M6.7、安芸灘の深度60kmで発生、死者2名、今治市や松山市など広い範囲で震度5強の揺れを観測、湾岸部では液状化発生、瓦屋根の被害多発。

平成13年6月 松山豪雨災害(梅雨前線)²⁾

死者1名、2戸全壊、連続雨量250mm、松山市の北東部の柑橘園で斜面崩壊と土石流が多発。崩壊が発生した地点の地質はまさ土ならびに和泉層群の風化土である。

平成13年9月 高知県西南豪雨災害(秋雨前線)

土佐清水市や大月町などで床上・床下浸水1,120戸、日雨量605mm、コミュニティが健全であり、助け合いにより奇跡的に死者ゼロで、マスコミにも大きく取り上げられた。

平成16年8月～9月 平成16年台風災害^{3), 4), 5)}

台風10、15、16、18、21、23号により四国各地で甚大な被害発生。特に瀬戸内側で被害大で、瀬戸内側の自然災害への備えの弱さが露呈した。

3. 平成16年の台風による特徴的な災害

平成16年は台風の当たり年であった。台風10号(7/31-8/2)に始まり、台風15号(8/17-18)、台風16号(8/30)、台風18号(9/7)、台風21号(9/29)、台風23号(10/20)による被害が出ている。以下に特徴的な被害をもたらした台風10号、16号、21号について簡単に触れておく。

○台風10号災害

台風10号は7月31日の午後4時頃に高知県西部に上陸し、松山市、広島市を通過し、深夜0時頃に日本海に抜けた。その後、8月1日の午後9時頃に朝鮮半島東海上で弱い熱帯低気圧に変わり停滞した。この熱帯低気圧に南風が吹き込み、四国の南東部では記録的な豪雨に見舞われた。特に、徳島県の中央部の山間地域では日雨量、連続雨量ともに日本記録を更新した。この豪雨により木沢村や上那賀町で大規模山腹崩壊が発生した。そして、急峻で狭い谷筋や扇状地などにへばり付くように建っている民家が損壊し、また道路損壊で集落が孤立した。

○台風16号災害

台風16号では、香川県で未曾有の高潮災害が発生し、床上浸水8,393戸、床下浸水13,424戸、死者3名という被害が生じた。高潮は台風の通過と大潮の満潮とが重なったことにより、高松港での最高潮位が246cm(TP)にも達したことによる。高松市は自然災害に見舞われたことが殆ど無いところである。今回の高潮災害は、自然災害の怖さをまざまざと認識させることになった。

また、愛媛県大洲市では洪水により床上浸水263戸、床下浸水237戸の被害が発生した。大洲市の洪水災害は平成7年に続くものであり、平成16年は台風により3度の洪水に見舞われた。大洲市は一級河川である肱川の遊水地として形成された大洲平野に開けた町という地理的条件により、水害が繰り返されている。平成15年10月に肱川河川整備基本方針が策定されて、治水ダムである山鳥坂ダムの建設なども盛り込んだ本格的な河川整備が進められようとしている。

○台風21号災害

愛媛県小松町から四国中央市にかけて甚大な被害が生じた。土石流や洪水被害により、JH松山自動車道、国道11号線、JR予讃線、それと主要県道の全てが寸断され、四国瀬戸内側の大動脈がマヒした。四国がこれまで経験したことがない災害であった。この台風による被害は愛媛県だけで死者14名、床上浸水1,816戸、床下浸水4,142戸、被害金額198億円に上っている。写真-1に新居浜市大生院のJH松山自動車道沿いの自然斜面で発生した大規模崩壊地の調査光景を示す。調査しているのは愛媛大学自然災害学術調査団員である。この大規模崩壊地の復旧の他、本線に流入した土石流堆積物などの除去も併せて、10月4日午前7時40分まで松山自動車道の一部区間は通行



写真-1 新居浜市大生院での愛媛大学調査団による斜面崩壊調査の状況(松山自動車道本線にて)